

## 2 『傷寒金鏡録』の思想についての考察

## 西 卷 明 彦

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

日本歯科大学医の博物館

『傷寒金鏡録』は、元代の敖氏により書かれた中国伝統医学最初の舌診書と言われているが、すでに原本は失われている。舌診は、中国伝統医学の望診、問診、聞診、切診の中の望診に属し、正気の盛衰、病位の深淺、病邪の性質、病勢の進退、疾病の予後、処方決定に重要な役割を荷なっている。舌の変化について、舌乳頭に注目した小林寛氏によれば、「外因性要因は乳頭の上皮細胞層に影響を及ぼし、内因性要因は乳頭の結合織芯に影響を与える。これらの内外からの要因と加齢の要因が相乗的に作用して舌乳頭の退縮が進行するものと考えられる。ヒトの舌乳頭の外形と結合織芯の立体像は若年者には特徴的な形態が保持されているが、高齢者では種々の程度の退縮変形が起こる。しか

しこれらの変形は必ずしも加齢に比例して起こるのではなく、高齢者間でも個人差が極めて大きいものであった。」と記している。このような舌の変化について、中国伝統医学ではすでに、『内経素問』刺熱論篇第三十二に、「肺の熱病なる者は、先ず淅然として厥し、毫毛を起たしめ、風寒を患み、舌ばみ、身熱す。」と記されている。このような舌診について、『内経素問』以外にも『靈樞』、後の『傷寒雜病論』、『諸病源候論』などにも記載されている。舌診についての概念がまとまってくるのは、宋金、元代で、この時代、朱肱による『傷寒類証活人書』、錢乙の『小兒藥証直訣』、陳言の『三因方』、李東垣の『脾胃論』、成無己の『傷寒明理論』で、各論について舌診を取り挙げている。

現代に伝わっている最古の舌診の専門書は、杜本による『敖氏傷寒金鏡録』（一三四一年）である。これに薛己が注釈を加えたものが、『敖氏傷寒金鏡録』として、『薛氏医案十六種』朴本、『薛氏医案二十四種』朴本に収納されている。また別系統の異本として、一五五六年『敖氏傷寒金鏡録』が出版され、一五五九年に再刊

されている。「敖氏傷寒金鏡録」は、「傷寒舌診」、「外傷金鏡録」の別名がある。薛己は、一五〇八年に舌診のすぐれた医者に会い、薬を用いるたびに効果は上がったが、効果がなぜ上がったかについてその医者は、何も答えなかった。後に南雍で『金鏡録』を手に入れ、舌診と薬の処方、この本に書かれた通りその医者が行っていたことがわかったと、異本の『敖氏傷寒金鏡録』で述べている。

敖氏の『傷寒金鏡録』は、舌診図は十二図であったが、杜本は、「今、前の十二舌を以って明に著す。猶恐らくは未だ諸症蓋す事あらず。復二十四図作り、并に方治を左州に列すことは、區區として源推し流を尋ね実に生死を決す可きの妙也。」と記し、二十四図をつけ加えている。舌診図は、かならず白苔、淡紅などの名が刻まれ、これは彩色をほどこしても色が落ちて後世の人を誤らせることを恐れたためと言われている。白苔舌は、「舌白苔滑を見る者は邪初入る也。丹田に熱有り。胸中に寒有り。乃少陽半表半裏の証なり。宜しく小柴胡湯、梔子鼓湯えを用いて治すべし」と記

されている。これは、『宋版傷寒論』の、卷五第八陽明病の条文、「若しえを下せば、則ち胃中空虚し、客氣膈に動き、心中懊憹す。舌上苔ある者は、梔子鼓湯えを主る。」、「陽明病、脇下鞭満し、大便せずして嘔し、舌上に白く胎するものは、小柴胡湯を与うべし。上焦通ずるを得、津液下るを得、胃氣困りて和すれば、身に澌然と汗出でて解す。」と対応すると考えられる。

このように、敖氏の『傷寒金鏡録』は、『傷寒雜病論』を土台として記載されており、舌診について、特に薛己の思想を中心に、思想的背景について考察を行った。